慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	文化とパアスナリティ：現代社会学の一断面
Sub Title	La culture et la personnalite : la personnalite de base comme un concept sociologique
Author	仲, 康(Naka, Yasushi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1955
Jtitle	哲學 No.31 (1955. 3) ,p.85- 114
JaLC DOI	
Abstract	Certains anthropologues americains utilisent, depuis quelques amiees, des concepts autres que ceux de schemas de conduite (patterns) ou de fonction (role, status) pour analyser les relations qui existent entre la culture et la personnalite des individus, autrement dit, pour observer le rapport culture-attitudes. L'un de ces concepts est, par exemple, celui de personnalite de base, qui a ete cree par Kardiner. L'anthropologue Linton et le psychanalyste Kardiner ont, des 1937, etudie en commun le probleme pose par les rapports entre la personnalite et son milieu culturel. Le concept de personnalite debase apparait en 1939 dans un ouvrage de Kardiner, "The Individual and His Society". Ce concept est repris, et precise encore par Kardiner en 1945 dans "The Psychological Frontiers of Society" collabore par Linton et Cora du Bois. L'ensemble des theories de Kardiner est sommairement resume par son auteur lui-meme dans un chapitre de "The Science of Man in The World Crisis" edite par Lintoo, L'objectif de Kardiner n'est pas seulement d'eclairer les liaisons qui existent entre la configuration de la societe et celle de la personnalite. Il se propose, comme la plupart des anthropologues, sociologues et psychologues sociaux americains con-temporains, de fournir un terrain de rencontre ou les differentes sciences sociales pourraient s'integrer les unes aux autres en une grande science de l'homme. C'est en effet autour de ce concept que vont collaborer les sciences humaines. Et alors, la personnalite de base que designe-t-elle ? Une configtration psycholpgique particuliere propre aux membres d'une societe donnee, et qui se manifeste par un certain style de vie sur lequel les individus brodent leurs variantes singulieres: l'ensemble des traits qui composent cette configuration (par exemple, une certaine agressivite jointe a certaines croyances, a une certaine defiance a l'egard d'autrui, et a une certaine faiblesse du "super-ego") merite d'etre appele personnalite de base, non parce qu'il constitue exactement une personnalite, mais parce qu'il constitue la base de la person-nallte pour les membres du groupe, sur laquelle les traits de caractere se developpent, Elle varie avec les groiipes. Elle n'est pas seulement la base de la personnalite des individus, mais encore le fondement de la signification et de la function des institutions, en tant que celles-ci, comme dit Durkheim, sont des manieres d'agir, de sentir et de penser. Mais la personnalite de base n'est pas seulement le produit d'une abstraction psychologique, elle est aussi un moyen de comprendre la culture dans sa totalite. Comprendre une culture comme un tout, ce n'est pas simplement accumuler des informations sur les institutions; les faits, comme dit Sartre, ne constituent pas l'essence par leur simple accumulation. Bien au cpntraire, le sens eat toujours le sens d'une unite: comprendre une culture, c'est comprendre l'unite de ses traits ou de ges institutions: la comprendre comme un tout. Or ce qui unit la culture et la personnalite se trouve, semble-t-il, dans le concept de la personnalite de base. Car entre eelle-ci et la culture il y a une relation etroite; la personnalite de base est a la fois le sens de l'individu et de la culture, C'est ce qu'ex-prime le schema ci-joint.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000031-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文化とパアスナリティ

——現代社会学の一断面——

仲　康

わが国現代社会学の動向と課題

戦後わが国の社会学において急速に発展してきたものに、社会調査をあげることが出来る。勿論この社會調査は戦前においても、戸田貞三博士及びその門下の〝家族の研究〟にみられる如く、(一)既に社会学の実証的特殊研究の分野として、社会学の基礎理論と共に存続して來たものであるが、それが最近において特に注目される理由として、(一)研究者が内なるものより外なるものへと眼を転じ、かくして個々の実証的特殊研究から社会学理論の再編成を意図していること。(二)戦後アメリカの一学風が著るしくわが国の学会を風靡して、その政策学的、実利主義的傾向が増大化したこと等があげられよう。

例えば、戦前の代表的社会学者高田保馬博士が、〝現実社会学は社会学の法則科学的性質を忘れたるものであり、抽象と現実遊離とを以て現代の社会学を難ずるものは、法則科学の本質を知らざるものである。〟(二)(傍点筆者、以下同じ)と云うに対して、戦後の若き一社会学者城戸浩太郎氏が、〝今年は憲法改正の問題となる年であり、それと共に権力はもつと直接的に社会科学に圧迫を加えてくるであろう。この意味で社会科学は大きな転換期にたつ。こう云う情勢の中

で、日本の社会科学は解明しなければならない多くの問題を抱えているのである。従つて日本の社会科学が進歩を約束されるとすれば、大衆との直結において日本の現実の課題を、課題とした学問的研究を進めてゆくほかはない。(三)〃と述べている。

前者即ち二十世紀前半の社会学者が、主として抽象の世界へと益々歩を進めて行こう（勿論このような傾向に対立するものもあつた。）と云うのに反して、後者即ち二十世紀後半の社会学者が、益々現実へとの対決を要請しているのは、歴史の変動が、社会の動きが、夫々の社会学者の口をして、そのように云わしめているのであろうか。

先に上げた二人の社会学者の言葉が、夫々の時代の代表的言辞であるとするならば、社会学の真に進むべき道と云う観点にたつてそれらをみるとき、その何れが真、何れが偽の問題は別として、抽象と現実が如何なる〃共通の場〃において連結されうるか。またその方法如何と云うことが、二十世紀後半の若い世代に課せられた社会学のオリエンテーションにおける一番大きな課題であろう。武田良三教授がこの点を指摘して、〃社会的現実の特殊な領域をめぐら減法に分析、記述して、ぼう大な資料を累積することが、一体なんの意味と価値を持つかを逆に反省してみる必要がある。(四)〃と云い、マートンの中範囲の社会学的理論に(五)注目しつゝ、実証的なフィールドの調査、記述、分析を益々提唱し乍らも、一方において理論的武器の必要性を強調しているのは、武田教授が年令的にはむしろ二十世紀前半の社会学者の部類に属し乍らも、そのモラルにおいてむしろ我々若い世代のそれを凌駕し、同教授が卒先してこの二十世紀後半の課題の解決へとアプローチしていることを示すに他ならない。たしかにフィールドの踏査が盛行すればする程、調査における一定の中核構造体の設定作業（frame-work）が必要であろうし、そこにおける概念図式の樹立が重要な役割を演ずるであろう。而してこのことは二十世紀後半の社会学の基礎理論の分野で、是非ともなしとげなけれ

ばならない仕事なのである。

以上の如き二十世紀前半から後半への社会学の転換が、一面において危機の時代を背景とした社会学者の物の見方、思考の仕方に由来するとしても、然し乍ら単にそればかりではないように思われる。いま〃関連〃と云う窓を通じて諸科学の歴史的発展をみるとき、夫々の科学が独自的に発展して来たものでなく、相互にからみ合い、えいきようし合つて成長して来たものの如く観察されうる。例えば十九世紀の社会学が生物学との類比（アナロジー）において成立したのは、当時の生物学が目ざましい勢いで成長し、それが同時代の社会学者の眼に一杯に拡がつてみえたからであろう。而してそれは当然のことと首肯されるし、二十世紀後半の社会学がミクロとマクロの問題を包蔵しつゝ、より純粋な、より法則的であろうとみられる、スモール・グループやコミュニティの研究に精力的に突き進んでゆくのも、現代理論物理学が、極微の世界へと進んで、そこに全人類の生存を危うくする偉大なエネルギーを発見した、その驚くべき業績のえいきようをうけているのではないであろうか。湯川秀樹博士の〃理論物理学の創造的活動の中で一番大切なものは、ある観点からみて不合理と思われることがらの奥底に、ある合理性を発見することである。そのためには新しい観点へ飛躍的に移ることが必要であつた。同じ様に、人間世界の出来事に対しても、一見きわめて不合理と思われることがらの奥に、人間の存在の仕方の、ある必然性を洞察する処に、知性を含めた人間精神の創造的活動があるであろう。〃[六]という言葉の中に、現代の社会学がスモール・グループやコミュニティの研究を通じて、人間の存在様式のある必然性と云うか、法則性を実証的にたしかめてゆく意図がうかゞわれるのである。ソローキンが〃社会学は時空の間において反覆され、その結果起る所の、なんらかの一様性あるいわ恒常性、類型性を示す社会現象の諸側面並びにそれらの関係にのみ関心をもつものである。〃[七]と云うのも、複雑な現象複合体としての人間社会の、その中に見られる

存在様式と作用様式の規則性を探求することに他ならないであろう。既にタルドはその名著〃社会法則〃の中で次の如く云う。

〃色とりどりの奇怪な絵画の継続する歴史の画廊をかけめぐるとき、また互いに異なりそして変じ止まぬ諸民族の間を旅ゆくとき、皮相な観察者は、社会的生の諸現象がいかなる一般的公式、いかなる科学的法則によつてもまとめえられないものであり、従つて社会学を建設せんとする企図は、一の幻想にすぎないという印象をうけるであろう。けれども、星きらめく大空に想いをはせた最初の牧夫たち、草木の生の秘密を解き明かさんとした最初の農夫たちも、蒼穹における秩序なき光のきらめき、千変万化の天候、千差万別の動植物を前にして、同じような印象を受けなかつたであろうか。そして天文学や、生物学などという考えは、その当時の人達にとつて、この上もなく法外なことゝ映じたに違いない。しかもこれらの科学はゆるぎなき基盤の上に、現に法則科学たることを誇つているではないか。社会的諸現象の無限の多様性――このことからして直ちに社会学の建設を断念するのは早急にすぎるであろう〃(八)と。タルドに従えば、反復の法則、対立の法則、適応の法則、この三者は限りなく豊かな宇宙の宝庫を開く三つのカギであり、科学の目的はその対象領域に固有なる夫々の側面において、これらの三法則を明かにすることにある。従つて社会学が一つの科学として成立すべきであるならば、社会的諸現象の領域においても、この三法則の支配することが見出されなければならないのであつた。

然し人間社会の出来事の場合には、合理性とか必然性とかを見出すことはそう容易でない。湯川博士が〃そこでの一番大きな問題は、知性がまだ気付かずにいる潜在意識の仂きが、しば〳〵決定的な意味を持ちうることにある。〃(九)と付言しているのをみるとき、社会科学が単に自然科学への追従によつて、解決されるであろうとみるのは早計である。(一〇)

対象はより複雑であり、より深刻である。たとえ対象がスモール・グループであろうとも、集団の内部で作用し合い、そこに躍動するのは陽子や電子ではなくして、湯川博士の云う如く、知性が容易に合理的に把握することの出来ない、人間の感情とか情緒とか云われるものである。而もそう云った潜在意識の方が、そこではしば〳〵決定的な意味を持ちうるのである。故松本潤一郎博士はこの点に関して、次の如く述べている。

要約すれば、社会学は人間意識的現象としての、社会的事実を研究する科学であるという意味において、J・S・ミルのいう〝精神科学〟の一部であると云えるし、あるいわまた、高田博士に従つて〝人事科学〟に帰属させられるであろう。然しそのいづれの場合においても社会学は、たしかに自然科学に所属するものではない。勿論、ディルタイが対象的把握がすべての科学に共通であると云う点において、社会学は自然科学と多くの共通的特質を具えている。例えば、実在説明科学という資格において社会学のとる根本的方法は、パレトーのいわゆる〝論理的・実験的方法〟であり、デュルケェムの社会的事実を〝物として〟考察する観察態度である。これは自然科学的論理によつて経験的社会現象を把えんとするものであり、社会現象をして経験科学の具体的対象物とすることに他ならない。

然し乍ら、社会的事実はデュルケェムも警告する如く、あく迄も社会的な物(chose sociale)であり、自然的事実の如く感官的に知覚しうる物ではない。むしろそれは感官的知覚以上の、ある精神的な物なることに注意せねばならない。カント的表現に従えば、前者が存在(Sein)であるのに反して、後者は知覚的ならざる物である。而してこのことが、社会学的研究に特殊の観察方法を必要ならしめ、従つてまた社会学に自然科学とは異つた特質を附与することとなるのである。社会学の場合において、その対象は一見具体的な物である如くみられるが、実はその物が社会学の直接的対象であるのではなくて、反つてこのような物に附着している所の形式的、理解的な価値的事実が対象となるのであ

る。而してこの価値的事実は従来意味的な物（Sinn）と云われて来たが、社会的事実が意味的なる関係上、ここに社会学は感官的観察法以外に、理解的な観察法を用いなければならない理由が与えられるのである。(一一)このことはまたアメリカの心理学的社会学派の代表者中、最も独創的とみなされる社会学者、クーリーの言によつても明かにされる。即ちかれに従えば、社会学の著るしき特徴は、その研究者自身が対象たる生活過程の、意識的部分であるということにある。従つてその本来の研究法は、あく迄も〝同情的内省〟、またわ〝同情的参加〟でなくてはならない。今我々がこれらの方法をかえりみて、ドイツ流に翻訳すれば、疑いもなく〝理解的方法〟と云わるべきものであり、この点に着目してみれば、最近のキュヴィリエが統計的方法を、社会学の根本的方法の一つとして重要視し乍らも、その他にモノグラフィ的方法、歴史的比較方法、民族誌的方法をあげ、以上の四つを複雑な社会的全体の分析に必要な方法とし、それらの使用にあたつては、いかなる注意が必要であるかを示唆しているのは、(一二)注目すべき見解であることがわかるであろう。

このように考えてくると、最近の社会調査が単なる数字の羅列や、複雑な人間関係諸現象の平面的記述から脱却して、いわゆる文化の概念を導入し、これを文化人類学的に処理する方向へ進んで来ているのも当然のことと云えよう。例えば、米山桂三教授が工場における集団の社会学的考察に際して、〝人間関係そのものの明確化及びそう云つた人間関係の秩序の研究、乃至はそれへの実践的施策の実行にあたつては、是非とも社会人類学乃至は応用人類学への志向が要請されなければならない。(一三)〟と云い、また福武直助教授等の行つた〝アメリカ村〟の研究に対して、泉靖一助教授が〝本研究の主題の性質上、当然取上げらるべき人類学的視覚と方法が欠如している。……少くとも文化変容について眺めようとするならば、各文化要素について一貫した視角から観察さるべきであり、若し出来うれば、文化全体の変容の過程における、心理的過程の分析がなさるべきであろう。(一四)〟と述べているのは、かれらが現状に満足せず、従来の

社会学的調査方法から脱却しようとする一つの努力ともみられる。而らば、米山教授が人類学的志向と云い、泉助教授が人類学的視覚と方法と云うのは何であろうか。このことを従来の社会学的方法と比較しつゝ、少しく述べてみたい。

〔註〕

（一）新明正道「社会学史」、福武直「社会学の基本問題」等参照。
（二）高田保馬「社会学概論」。
（三）城戸浩太郎（東大卒、現学芸大学講師）毎日新聞論説「大衆との結びつきを」。
（四）武田良三「社会学の構造」。
（五）R. Merton; Social Theory and Social Structure.
（六）湯川秀樹、同紙論説「知性と創造と幸福」。
（七）P. Sorokin & Others; A Systematic Source Book in Rural Sociology.
（八）G. Tarde; Les Lois Sociales. 新館正国「社会学概論」、今井仙一「フランス哲学の主要問題」等参照。
（九）湯川、前掲論説。
（一〇）例えば、かゝる見解は横山寧夫「知識と社会体制」哲学第三〇輯所収、にもみられる。
（一一）松本潤一郎「社会学論及学説」
（一二）A. Cuvillier; Introduction à la Sociologie et Manuel de Sociologie.
（一三）米山桂三、尾高邦雄「産業に於ける人間関係の科学」書評、社会学評論一六号所収。
（一四）泉靖一、福武直篇「アメリカ村」書評、同一三・一四号 〃。

社会学的見方と文化人類学的見方

従来の社会学的社会調査によれば、主として間接的方法、すなわち文献、文書、および既存の統計的資料などを利用し、これにフィールド・ワークを加味してその研究に従事し、家族、離婚、犯罪、農村、都市、社会的緊張、産業意

欲等々、特殊具体的にして限定せられた、社会関係の諸問題を対象とするに反して、文化人類学的社会調査においては、(その対象が、従来は主として未開社会に限られていたが、) 主として直接的方法、例えば、さま〳〵の形式のフィールド・ワークによつて研究資料を獲得し、これらの資料を分析し、説明し、原則として特定の社会を、その全体性において能うる限り具体的に、詳細に把握しようとする。クラックホーンに従えば、アメリカの社会学は十九世紀の自然科学をモデルとしたものであり、正確さに大きな関心をもつているのに対し、文化人類学は基礎において観察を主体とした科学であり、前者が実験を主体とした科学であるのと性格を異にする。文化人類学はフィールド・ワークにあたり人工的条件の下ではなしに、ありのまゝの状態のものを対象とし、現状の記録のみを事とするのであつて、一見特異な調査者にとつて、馬鹿げているように思われる事実にも意味を見出してくるのである。(一五)

(一五) C. Kluckhohn Seminar. 1954.

文化人類学的方法の特色

このようにみてくると、文化人類学的調査方法は、従来の社会学的調査方法に欠如した、何物かを持つているようである。よく引用される言葉ではあるが、文化人類学的方法と社会学的なそれとは、パイの切り方を異にするのであろう。クラックホーンはアメリカの文化人類学的調査研究の特色として、次の五つをあげている。(一六)

第一に、文化人類学者は自己の専門に不拘、問題全体を各部門に亙つて、綜合的に把握しようとする所の統一性をもつている。

第二に、アメリカの社会学的調査は主として対象の横断面に集中的な調査研究を行うが、これに先行する時の推移

（歴史性）を考慮していない。これに反して文化人類学では歴史的、生物学的、文化的、状況的なものを同時に重視する。

第三に、文化人類学は比較的見地を重視する。従つて一定の対象のみの研究に終ることなく、必ず他の部族、他の地域との比較研究を行う。

第四に、既に指摘した如く、文化人類学では研究室や図書館における理論的研究よりも、フィールドの研究に重点がおかれている。

第五に、文化人類学の主要概念は〝文化〟であり、これを〝全体として〟（as a whole）捉えることによつて、人間の社会的行動を動的に、あらゆる側面を包括的に把握しようとする。(一七)

以上の五つの特色の内に、重要と思われる次の二つの点が指摘される。

第一に、文化人類学的方法がフィールドの研究に重点をおくと云うことは、クラックホーンの見解を待つ迄もなく、かつてデュルケェムがボルドー大学にて初めて、科学的社会学に着手したとき、彼が目指した最初のものであつたのである。デュルケェムによれば、彼の意図したものは、（一）心理学のほかに、新しく社会学的な問題把握の方法があると云うことを示すこと。（二）今迄スコラ哲学的な仕方で取り上げられていた人間行動の諸問題の、科学的な解決に貢献しようと云うことであつた。かくしてデュルケェム及びその学派の人々によつて蒐集され、取り扱われた統計学的、人類学的、法学的資料は驚くべきものがあつたのである。

然し乍ら、その事実の取扱い方において、先に述べた文化人類学的方法とは全く趣を異にする。デュルケェムとその学派の人々は、たとえいかに資料の蒐集、探究に努力したにせよ、今日の如く資料を探すために、自ら現地に赴くこ

とはしなかつたのである。従つて現地において文化人類学者が行う如き、自らのために資料を作り出すことは、考えもしなかつたことなのである。このことをステッツエルは、〃レヴィ＝ブリュールの如き人ですら、その調査旅行は多くの場合、自宅の書斉から大学の図書館へ通うくらいのものであり、研究上の交渉が自分の仲間、学生のサークル以外に及ぶことは決してなかつた。それ故、協同研究と云う如き、かれらの慮外のことであつた。〃(一八)と述べている。一方文化人類学においてはどうであろうか。文化を全体として捉える関係上、調査者がすべての領域に亙つて専門家になることは不可能であるから、何うしても協同研究が必要とされてくる。最近のわが国の社会調査が、次第に大がかりな、多数の専門家より構成された調査団によつて、なされるようになつて来たのもこのためである。研究される対象そのものは過去から現在にかけて不変であるに不拘、研究する仕方、物の見方が変わつてくるにつれて、調査の研究体制それ自体がそのえいきようをうけて、過去と現在において変化しているのは興味あることである。何故なら、先に示した諸科学の相関的発展に思いを至すとき、こゝでも同様なことが云えるからである。即ち現代物理学の実験的研究や理論的研究は、もはや過去におけるそれらの如く、一人や少数の人々によるものでなくして、多数の人々の協力によるものだからである。

第二に、文化人類学の主要概念が〃文化〃であり、かゝる文化を〃全体として〃把握するということは、最近の調査傾向を示唆するものとして注目に値しよう。稍々詳細に考察してみたい。

(一六)　武田、前掲書及び「文化の概念」教養講座「社会学」所収、及び C. Kluckhohn & W. H. Kelly; "The Concept of Culture". The Science of Man in the World Crisis. ed. by R. Linton.

(一七)　C. Kluckhohn Seminar.

(一八)　J. Stoetzel; 「フランス社会学の近況」社会学評論九号所収。

文化概念の規定

文化人類学の主要概念が文化であるとするならば、文化の概念規定は最初に取上げらるべき重要な事柄であろう。何故なら日常普通に用いられている語を、同時に学問上の用語として採用する場合には、それに附随したあいまいな常識的な意味にわづらわされて、一義的な概念規定の確立がさまたげられ、社会的現実の科学的分析に混乱がひき起されるからである。文化とか社会とか家族とかいう語は、多義的に用いられる点では、その著るしい例に属する。(一九) 例えば、文化の日、文化人、文化国家等、日常我々が用いる文化なる語と、学問的に用いられる文化の概念との間には、相当の開きがあるとみて差支えない。このことをクラックホーンは巧に記している。

歴　史　家、先日私が文化人類学における文化の概念は、歴史家のそれよりずつと包括的であると主張したのは正しいでしょうか。

文化人類学者、その通りです。文化人類学者にとつては、粗末な鍋もベートフォーフェンのソナタと同様に文化の産物です。

実　業　家、それを聞いて安心しました。私の妻ときたら文化人と云えば、ドヴィシイやエリオットやピカソのような人々について語れる人なのですからね。(二〇)

さてこのような文化概念の多義性へアプローチする仕方は、諸学者によつて夫々異なるが、こゝでは主として尾高教授と武田教授の所説を参照しつゝ、空間と時間の両面からアプローチして行きたい。(二一・二二)

(一九)　姫岡勤「家族の概念」小松堅太郎編「社会学の諸問題」所収。

(二〇) C. Kluckhohn：前掲論文。
(二一) 尾高邦雄「社会学の本質と課題」及び横山、前掲論文参照。
(二二) 武田、前掲書及び前掲論文参照。

文化概念の空間的アプローチ

文化概念の多義性を空間的に分析してみると、そこに二つの見解の類型性がみとめられる。

一は、文化を社会的所産とみる見解――主としてドイツ的な見解。

二は、文化を人間の行爲や生活の様式とみる見解――主として英米的な見解。

一の見解は、主としてドイツ的な文化社会学の考え方に多くみられるものであり、これらの見解の類型性は、文化を所産あるいわ反映と見、社会はこれを生み出した源泉、あるいわ実在とみることにある。唯物史観における下部構造を社会と解し、上部構造を文化と解する如き、その典型的な例であろう。周知の如く、唯物史観では前者は主として経済的生産関係であり、後者はこれを基盤としてその上に築かれた法律、政治及び諸種のイデオロギーである。而してかゝる生産関係のすべてのみが眞の実在であり、その上に築かれる上部構造はその反映にすぎず、つねにそれによつて拘束され、左右されるものである。マンハイムの云う知識の存在被拘束性(二三)もこのことを意味する。またA・ウエーバーが文化運動や文明過程の基盤として社会過程を考えている点では(二四)、やはり同様の見解に立つと云えよう。

このようにドイツ的な文化社会学の根本問題は、文化と社会の問題であり、換言すれば、社会に関係づけられたかぎりでの文化がそれの主題である。従つてドイツ的な文化社会学では文化をそれ自身としてではなく、社会との関連において、文化と社会との関係を一つの上下関係としてとらえるのである。上部構造と下部構造、反映と実体、所産

と源泉と云つた如き、すべてこれである。而してこの二つの層の間には、一定の依存関係が想定されるが、もとよりこの依存関係は必ずしも初期の唯物史観にみられる如き、一方的な依存関係――社会が文化を規定する――として考えられるものでなく、社会が文化や文明によつて逆に規定される如く、むしろ相互的な依存関係として考えられる場合が多い。然し乍らこの関係を一方的とみるにせよ、相互的とみるにせよ、この立場では社会から文化を捉えることに主眼がおかれている。これに反して文化を、それを包含する所の〃全体としての社会〃との関係において捉えるのが、主として英米的な見解であろう。

二の見解によれば文化は一つの行為様式、生活様式として理解される。かゝる〃様式として〃の文化は、一定の社会の成員達にえいきようを与え、彼等の行為や生活の中に機能して、これらに特定の範型（パターン）と方向とを与える。それは恰もデュルケェムの云う如く、外在的事物として拘束性[二五]を発揮する。この意味において、様式としての文化はデュルケェムの〃作用様式〃[二六]（manière de faire）であり、作用様式である限りにおいて文化は社会に内在する。かくして文化と社会との関係は上下的な関係でなく、部分と全体との関係になるのである。即ち社会は一つの統合的全体であり、文化はこの全体の中で夫々の特定の役割を担うところの部分である。

かゝる見解に立つてみれば、用具、施設、制度、芸術品、技術、慣習、原規（モーレス）といつた如きものが、文化的要素として個別的に問題となり、それらの相互関係、社会的全体の中で占むる地位、役割、即ちその中で果す機能が研究の対象となつてくるのは当然のことである。

かくして文化はそれ自身として、個々に把握されることなく、つねにそれが機能づけられている全体（社会）から理解される。マリノフスキーが〃機能的に〃把握することを主張し[二七]、先にあげたクラックホーンが〃全体として〃把握

すると云うのも、このことを意味する。クラックホーンが〃心理学者ならこゝに描かれた一枚の絵をみて、それが行動の所産であり、描いた個人のパァスナリティのあらわれとして観察するだろう。私が人類学者としてみるときには、一つの文化と繋りをもつた範型(パターン)として絵を観察する。それ故、一枚の絵も、その集団のもつ文化の表現としてみてゆく。〃(二八)と述べているのは興味ある言葉であろう。

以上が文化概念の空間的アプローチの概略であるが、この分析の仕方は、多義的な文化概念を主としてドイツ的な見解と、英米的な見解に従つて一応二つの類型に分つた点において平明であり、注目すべきものがある。然し乍ら、その各々の見解について更に精細な検討をしてみるとき、夫々の國の文化概念に対する諸学者の見解のニュアンスとも云うべきものが、例えば英米的な見解において、文化が一つの〃様式として〃理解される如く、一様に規定されている処に難がある。いま(一)のドイツ的な見解はさておき、当面の研究課題である(二)の英米的な見解(特に文化人類学におけるそれ)について、そのことを検討してみよう。即ち英国のタイラーが文化の概念を古典的に規定して以来、この概念は時代の推移と共に多くの文化人類学者によつて、様々に定義され規定されて来たのをみる。従つて多義的な文化概念を理解するためには、単に空間的にアプローチするばかりか、時間的にアプローチすることも必要となつてくるのである。

(二三) K. Mannheim; „Wissenssoziologie", Handw. d. Soziol.
(二四) A. Weber; „Kultursoziologie", Handw. d. Soziol.
(二五) (二六) E. Durkheim; Les Règles de la Méthode Sociologique.
(二七) B. Malinowski; „Culture", Ency. of S. S.
(二八) C. Kluckhohn Seminar.

文化人類学における文化概念の時間的アプローチ

タイラーは次の如く規定する。即ち文化とは、知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習、及び所与の社会の成員が收得したその他の諸能力、種々の習慣の複合的全体であると。(二九) この見解によれば、文化は主として非物質的な社会的事実と理解されるのであるが、クラックホーンが述べる如く、人類学者にとつては粗末な鍋も、偉大な音楽家のソナタと同様に文化的所産なのであるから、今日の文化人類学では広く人工物 (artifact) をも含めて、文化を広義に理解しているようである。事実ウィレイは、タイラーのこの規定を簡明なものとして称賛し乍らも、この規定には文化の一部としての物質財に関する注意が欠如しているとして、新たに物質財の項目を加えている。(三〇) 然しこのように文化内容の欠如した項目を次々と附加していつても、この内容を完全に網羅することは不可能であるし、反つてそのようなことをすれば、徒らに繁雑になることを免れないであろう。クラックホーンはこの点を指摘して、〃要素の列挙は如何にしても不完全である。列挙法の定義で明白に述べられていない要素は、たとえその中にあつても兎角忘れがちとなる。例えば、〃言語〃は以上の列挙項目の中に含まれていない。〃(三一) と批難している。そこでこうした列挙項目主義の立場を捨てて、文化を〃社会的遺産〃あるいわ〃遺伝〃とみることによつて、文化内容の目録では云い現わせない文化の一側面——文化の統合性、組織性——を強調するようになつて来たのである。例えば、マリノフスキーにおける〃文化は社会的遺産であり、独自の一実在である。〃(三二) とか、リントンの〃文化は人類における社会的遺伝であり、あらゆる社会の文化は、その社会の成員が学習と模倣を通じて習得し、共有する所の種々の観念、情緒的反応、習慣的行動の範型化されたすべての物から成立つ。〃(三三) と云う如きこれである。かゝる概念規定は一時期におけるマリノフスキーやリン

トン等によつて広く行われて来たものであり、このことは人間が生物学的遺伝の他に、社会的な遺伝をも持つという事実を人々に喚起さすのに、非常に役に立つて来たのである。然し乍ら、かゝる見方にとつて主要な欠陥は、それらが文化の余りにも大きな安定性と、人間の側における余りにも受動的な役割を暗示することである。(三四) 武田教授も云う如く、我々は文化と云う大きな社会的遺産の前に佇んで、人間はたゞ拱手傍観する以外にないのである。それでは余りに無力な消極的な存在であろう。(三五) たしかに〝時間〟という窓を通じて文化の動きを眺めるとき、文化は世代から世代へとうけつがれる。然し我々は生物学的遺伝原質を受領するのと同様に、何等の努力も抵抗もなく、文化をうけつぐのではない。一つの社会が如何に単純であり、孤立して小なるものであろうとも、文化の変動は世代から世代へとたえず行われるものであり、新しい思想、新しい技術が文化と文化の接触によつて、その社会の成員の思惟の中に入つてくるのである。何故なら文化は生きているものであり、決して静止しているものでないからである。(三六) 一方人間は単にダラードの云う〝文化的伝統の受動的担い手〟(三七) であるばかりか、文化の創造者であり、操り手でもある。最近の文化人類学者が、文化の動的性格とそこに仂く人間の行動やパァスナリティに注目して、文化を動的に一つの過程、一つの行動として捉えようとするのも当然の帰結と云えよう。

例えばクラックホーンは、いかなる文化も所与の社会における一連の習慣的、伝統的な思惟様式、感得様式からなり立つているものであり、これらの様式は逆にその社会の成員をして特質づけるものであるとし、(三八) さらに文化を詳細に定義して次の如く云つている。

一、文化とは陰陽二つの生活の構図(デザイン)が歴史的に作られた体系であり、

二、この体系はある集団の全員、あるいわ一部の成員によつて、一定の時期に共有される傾向をもつている。

いまこの定義を少しく詳細に分解して考察してみよう。

一、文化が歴史的に作られた体系であるとは、この定義における重要且中心的な部分であり、文化が歴史的所産であり、一つの組織された一全体であることを示している。

二、陰陽二つの生活の構図とは、文化が潜在的（implicit）と顕在的（explicit）の二つの側面をもち、かゝる文化が生活の様式や目的に対して、特定の方向づけの役割を果していることを示している。

三、集団の全員、あるいわ一部の成員とは、一つの文化を構成する青写真[三九]（blue print）のすべてが、性別、年令、階級、職業、社会的評判（prestige）の差違に応じて、必ずしもすべての個人にあてはまるものでないことを示している。

四、一定の時期に共有される傾向とは、文化のいろ〳〵な範型（パタ！ン）は静止しているものでなく、たえず時間と共に変わる動的な体系であり、それは必ずしも成員によつて〃共有される〃とは限らないが、そう云う〃傾向を持つ〃ということを示している。

（二九）E. Tylor; Primitive Culture.
（三〇）（三一）C. Kluckhohn 前掲論文。
（三二）B. Malinowski 前掲論文。
（三三）R. Linton; The Study of Man.
（三四）C. Kluckhohn 前掲論文。
（三五）武田、前掲書及び論文。
（三六）C. Kluckhohn 前掲論文。
（三七）J. Dollard; Caste and Class in a Southern Town.

（三八）C. Kluckhohn & D. Leighton; The Navaho.
（三九）C. Kluckhohn 前掲論文及び同ゼミナール。
（四〇）C. Kluckhohn 前掲論文。

文化とパァスナリティの相関性

さてこのようにみてくると、既に述べた如く、文化の概念は文化人類学においても決して一義的ではない。それが時の流れと共に、変化して来たのが理解される。注目すべきことは、諸学者の捉え方が静から動へ、従つてまた文化それ自体の研究から、文化とその社会に躍動する個人の間に明滅する火花の研究へと移行して来ていることである。文化は決して一つの実在や一つのものではない。それは人間有機体の裡に作用し、機能する所のものであり、マッキイヴァも云う如く、人間の行動を左右し、えいきようを及ぼすばかりか、パァスナリティの構造それ自体を形成するにあたつて重要な役割を演ずるものである。(四一) 一方この文化によつて形成せられ、逆にまたこの文化を創造し、変容し、運搬するのは、その社会の成員に他ならない。ベネディクトの〃個人はかれらの文明の命令を、機械的に履行するロボットではない。……それはつねに give and take の関係にある。(四二)〃とはこのことを意味する。更に彼女は〃個人の行動や意識は、文化と個人の対立を強調することによつて明かにされるものでなく、相互の援け合いを強調することによつて明かにされる。一方、文化の範型(パターン)を論ずるにあたつては、両者の関係が非常に密接なものであるから、文化と個人の心理との関係をくわしく考察せざるをえない。(四三)〃と述べている。パァスナリティがリントンの云う如く、個人に関係しつゝある心理学的諸過程や状態の体系化された一全体であるとするならば、ベネディクトの〃文化と個

人の心理との関係〃は〃文化とパァスナリティの関係〃に他ならない。

(四一) R. M. MacIver & C. H. Page; Society.
(四二) (四三) R. Benedict; Patterns of Culture.
(四四) R. Linton; The Cultural Background of Personality.

文化とパァスナリティ研究

かくして〃文化とパァスナリティ〃は〃全体として〃研究されなければならない。換言すれば、それらの相互関係においてみられねばならないと云う原則や認知は、今日の文化人類学的文献の殆んどすべてにみられる特徴である[四五]とまで云われるようになつて来た。

一方かゝる〃文化とパァスナリティ〃の研究は、最近とりあげられるに至つた部門であると[四六]云うクラックホーンの言葉や、この両者が相互に関係し合い、依存し合つているその仕方に、注意深い分析をしなければならないことに、文化人類学者達は気づきはじめたと[四七]云うマッキィヴァの言葉によつても理解される如く、文化人類学における〃文化とパァスナリティ〃の研究は、比較的新しい未開拓の研究分野であると云つても過言でない。本稿において〃文化とパァスナリティ〃の研究を取上げてみたのも、この未開拓地への数歩的アプローチを意図したものに他ならない。

文化人類学における〃文化とパァスナリティ〃研究が比較的新しい研究分野であつたとしても、他方この学問と最も密接な関係にある社会学においては何うであろうか。実はかれら文化人類学者達が、近年における精力的なフィールド・ワークを通じてかちえた所の中心問題〃文化とパァスナリティの相関性〃は、社会学それ自身が長い期間を通

じて対決して来た所のまさに基礎的問題――社会秩序と個人の相関性[四八]――であつた。（例えば、社会学の分野におけるこの種の初期の研究の中で、もつともえいきよう力をもつたものとして、トマスとヅナニエッキイの労作〝欧米におけるポーランド農民〟[四九]があげられよう。）従つて〝文化とパァスナリティ〟の研究は、ひとり文化人類学における研究の宝庫であるばかりか、社会学においても大切な宝庫であつたのである。

そればかりではない。リンドは〝パァスナリティと文化の正確な意義は、それが研究の附加的分野でなくして、あらゆる社会科学の分野であることにある。〟[五〇]とまで述べている。このことは、文化とパァスナリティの関係があらゆる社会学者、文化人類学者、社会心理学者にとつて主要な関心事であり、[五一]この研究部門は文化人類学、精神分析学、行動心理学等をかみ合せた研究部門と云えよう[五二]と云うリントンやクラックホーンの言葉によつても裏付けられる。かくして筆者は、〝文化とパァスナリティ〟のより精細な協同的アプローチを通じてこそ、現代的課題である社会諸科学の統合化、〝人間の科学〟の樹立が可能なのではないかと考えるのである。（筆者がこの研究を取上げた第二の所以はこゝにある。）

（四五）R. M. MacIver; 前掲書。
（四六）C. Kluckhohn Seminar
（四七）（四八）R. M. MacIver; 前掲書。
（四九）W. Thomas & F. Znaniecki; The Polish Peasant in Europe and America.
（五〇）R. S. Lynd; Knowledge for What?
（五一）R. Linton; 前掲書。
（五二）C. Kluckhohn Seminar.

リントンとカーディナーによる諸研究

一九三七年、人類学者リントンと精神分析学者カーディナー等が、コロンビア大学におけるゼミナールを通じて協同のもとに始めた一連の調査研究は、このような傾向にあるものとして注目に値しよう。フランスのR・ジローはこのことを次のように述べている。かれらの目的は単に、社会という複合形成体（コンノイギュラシオン）とパァスナリティという統一体（ユニテ）の間に存する、いろいろな関係を明かにするばかりではない。現代アメリカの多くの文化人類学者、社会学者、心理学者と同様、かれらは〃基礎的パァスナリティ構造体〃の概念（後に詳述する。）を通じて、社会諸科学が一つの偉大な〃人間の科学〃として相互に統合化される、その解ごう地を提供せんとしたのであると。さらに同国のデュフレンヌは〃事実これらの研究はリントンを中心とした一団の民族学者（訳註、文化人類学者のこと。）と、一人の心理学者カーディナーの協同の所産である。夫々の研究者達は各自の専門領域に留つて、民族学者は所与の文化における出来る限り精細な民族学的資料を提供したし、心理学者はこの文化の表示者である所の個人、即ちこの文化に応ずる所の基礎的パァスナリティの機能に基いて、これらの資料を分析し体系化したのである。〃と述べている。

即ちリントンとカーディナーは、数個の未開社会と現代アメリカの一村落（人口三百人足らずの一村落ではあつたが、）に関する詳細な研究資料に基いて、〃文化とパァスナリティ〃の一連の研究考察を試み、これらを〃全体として〃みることによつて、種々の文化とパァスナリティの諸類型の間に、give and take の関係がみられることを明かにしようとした。一般に〃文化とパァスナリティ〃における諸研究が、文化のパァスナリティに対するえいきよう、即ち個人の社会化における文化のえいきようを極端に強調するのに対して、リントンとカーディナーは文化の〃担い手〃

に眼を向けることによつて、文化とパァスナリティの相関性を強調しようとする。何故なら、パァスナリティが文化のえいきようを蒙るものであるならば、逆に文化はパァスナリティの映像の中にあるからである。

本節以下において、主として引用及び参考とした文献は次の如きものである。

R. Linton; The Study of Man. The Cultural Background of Personality.
A. Kardinar; The Individual and His Society.
〃　The Psychological Frontiers of Society.
〃　The Concept of Basic Personality Structure as An Operational Tool in The Social Sciences. (The Science of Man in The World Crisis. ed. by R. Linton).
C. Du Bois; The People of Alor.
E. Durkheim; Les Règles de la Méthode Sociologique.
M. Dufrenne; La Personalité de Base.
R. Girod; Attitudes Collectives et Relations Humaines.
T. Parsons; The Social System.

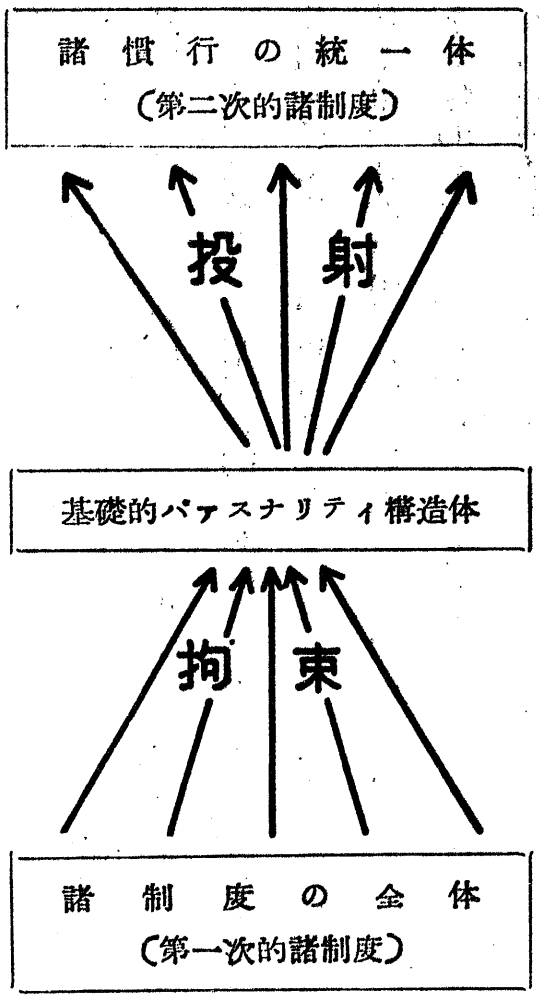
第一次的諸制度と第二次的諸制度

例えばマーキザス島民をとつてみよう。彼等には我々の社会にみられる如き、またフロイトやその弟子達にとつて神経症の原因として解釈された如き、性的衝動の強力な社会的役割は殆んどみられない。マーキザス島民は性に関しては全く偶然的であり、性的行動には極めて少ししか情緒的内容を与えていない。一方これに反して食物の稀少性、喰人行為等の危険（カーディナーの云う第一次的諸制度）については、いわゆる神経症的な極めて大きな〃不安〃を

示している。而してこれらの〃不安〃の周囲にはリントンの述べる如く、あらゆるタブー、規制行為が我々の社会の性について行われてるそれ以上に、体系化されて（かれのいう第二次的諸制度）いるのである。

またアロール島民をとつてみよう。彼等はお互に疑い深く、企業性や協同性に欠けており、たえず攻撃的である。この攻撃性は我々の社会においては、病理学的なケースにおいてのみみられるものである。このようなアロール島民の諸特性は、カーディナーの云う〃基礎的パァスナリティ構造体〃を特徴づけるものであり、母親が幼児期における子供の訓育を無視すること（第一次的諸制度）によつておこる、一つの複合形成体である。ついでこの複合形成体は外界にその欲求不満を下意識的に投射することによつて、自己調節を行い乍ら、アロール島民の利己的な、本質的に非協力的な、経済的に競争的な、文化（第二次的諸制度）を作り上げるのである。このようにみてくると、文化とパァスナリティの相互作用は、パァスナリティを中心としてみるとき、諸制度の間に一つの〃区切り〃を暗示している。即ち我々が諸制度をパァスナリティに仂く能動的なものとしてみるとき、これらは第一次的諸制度となり、パァスナリティによつて投射された受動的なものとしてみるとき、第二次的諸制度となるのである。カーディナーに従えば、これらの諸制度は、いわば公分母である処の〃基礎的パァスナリティ構造体〃という媒介者を通じて、前者と後者はつながるのである。何故なら、第二次的諸制度は、第一次的諸制度によつて作動された、〃基礎的パァスナリティ構造体〃の反作用の結果であり、投射されたものだからである。故杉浦健一教授が〃カーディナーは、基礎的パァスナリティ構造体を第一次的と第二次的諸制度との中間におき、いわば弁証法的論理方式によつて、パァスナリティと文化との関係を具体的に説明しようとした。〃と云つているのはこのことである。（杉浦健一「人類学」参照）

筆者はこれらの関係を次の様な図式で現わしてみた。



（註）第二次的諸制度……心理的内的諸型体（かれのいう基礎的パァスナリティ構造体）が外界に投射されて出来た、具体的外的諸型体（かれのいう投射体系）であり、具体的には習俗（民風）、原規（モーレス）、宗教、呪術等々である。

基礎的パァスナリティ構造体の概念

すでに筆者は文脈の所々において〝基礎的パァスナリティ構造体〟を指摘し、読者の注意を促して来た。事実〝人間の科学〟が協力して来たのもこの概念を中心としてであり、カーディナーが強調するのもこの概念であつた。而らば、かれの云う〝基礎的パァスナリティ構造体〟(Basic Personality Structure) とは如何なるものであろうか。かれによれば、〝環境の諸条件と社会的機構の諸側面（第一次的諸制度を形成する諸側面）は、個人がそれに適応するための基礎的諸問題を提出する。個人は一定の変えることの出来ない諸条件に応じて、いくつかの適応手段を展開し

てゆかねばならない。例えばあるコミュニティにおける食物の稀少性、性的タブー、幼時におけるあらゆる種類の基礎的訓練（食餌、授乳、離乳等の仕方、糞尿の仕末等々――かれは特にこれらを重視した。）というものは、個人が直接統制することの出来ない諸条件である。個人はたゞそれらに関して一つの態度を適応させてゆくにすぎない。個人の内部において、かゝる仕方で作られていく基礎的な諸系列、これが〃基礎的パァスナリティ構造体〃を構成するのである。それ故、〃基礎的パァスナリティ構造体〃は所与の社会の成員のすべて、あるいわ一部にとつて、独自な心理的複合形成体（反射的複合、行為図式、価値判断の図式等の一全体）であり、個人の夫々の変異（先天的、後天的）はその上にいろどられるものである。これが〃基礎的〃とよばれるのは、一つのパァスナリティを構成するのでなくて、その社会の成員にとつて、パァスナリティの〃土台〃を構成する基礎的構造体であるからであり、また個人の夫々の特徴は、この〃土台〃の上において独自的に発展するからである。それは所与の文化をもつ集団の成員に、共通なものであるばかりか、制度がデュルケェムの云う如く、行為や感得や思惟の様式である限りにおいて、それはまた制度の意義、機能の基体でもある。

然し乍ら、カーディナーも云う如く、異なつた社会には、異なつた〃基礎的パァスナリティ構造体〃があるというだけでは、それはなんら新しい意義を持たない。何故ならこれとよく似た考えは、既にヘロドタスやシーザーの書物の中に見出すことが出来るからである。重要なのは、かれらの指摘した民族性が如何にして生じ、如何にしてその社会の文化とえいきょうし合つているかの、動的な観察がなしとげられなければならないと云うことである。この概念が新しくかつ注目すべきものであるのは、その名称ではなくして、それが支持する所の手段であり、この概念が発生学的見地よりひき出す所の事実なのである。即ちこの概念は文化を考察する一つの手段であり、文化を〃全体とし

て〃考察する一つの〃作業用具〃なのである。

〔註〕〃基礎的パァスナリティ構造体〃の概念に対して明確性を支持するため、こゝにリントンの公式をかゝげる。それはリントンも云う如く、この概念がカーディナーによつて一九三九年、かれの著〃個人と社会〃において主張されて以来、多くの学者によつて使用されて来たが、その内容とくに用語において、本来の意義から多少逸脱したものが少くなかつたからである。

リントンによれば、カーディナーと彼によつて使用され展開されたこの概念は、それ自体にいくつかの異なつた要素を含む、一つの複合形成体（configuration）である。それは次の如き仮設（要請）にもとづくものである。

一、個人の幼児期における諸経験は、かれのパァスナリティの上に、とくにかれの投射体系（第二次的制度）の発展に対して、たえずえいきようをもたらす。

二、類似の諸経験は、それを蒙る諸個人の内部において、類似のパァスナリティ複合形成体を創出する傾向があるであろう。

三、すべて社会の成員が子供の養育に使用する技術は、文化的に範型化されるものであり、その社会の夫々の家族にとつて決して同一でないにしても、類似的になるであろう。

四、文化的に範型化された養育技術は、夫々の社会において相異する。

これらの仮設（要請）が正しく、かつ豊富な証拠によつて明かにされるならば、次の事が云えるだろう。

一、一定の社会の成員は、幼児期における経験の多くの要素を共通に持つだろう。

二、その結果、パァスナリティの多くの要素を共通に持つだろう。

三、諸個人の幼児期における経験は夫々の社会において異なつているから、パァスナリティの類型もまた、夫々の社会において異なるであろう。

あらゆる社会の基礎的パァスナリティ類型（タイプ）は、殆んどの成員によつて共有されるパァスナリティの複合形成体であり、それは

かれらが共通にもつ幼児期における経験の所産でもある。かゝるパァスナリティ類型は、個人のパァスナリティ統体（total personality）に符合するものでなく、その投射体系に、換言すれば、個人のパァスナリティ複合形成体の基礎となる、価値に対する態度の体系（value-attitude system）に符合するものである。従つて、同一の基礎的パァスナリティ類型は多くの異なつた行動型式の中でも反映されうるし、多くの異なつたパァスナリティ複合形成統体（total personality configuration）の中へも入りうるのである。

この概念の意義

一つの文化を〃全体として〃理解すると云うことは、それは単に諸制度についての沢山の知識の集積ではない。デュルケェムも云う如く、一つの個体がもつている一切の性格について、カタローグをつくるということは容易なことでない。すべて個体は無限であり、無限なものは究め難い。一つの社会の全体にわたる研究に着手し、そこで一切のものを把握し、説明することは、もつとも至難な、科学が最後でなければなしえないことである。そうであるとするならば、一つの文化を〃全体として〃理解するとは、リントンやカーディナーがくり返し云う如く、所与の文化の慣行、信仰、慣習等、あらゆる文化的諸特徴についての知識の〃銀河系〃から、なんらかの意義を見出すことに他ならない。サルトルも述べる如く、諸事実は単なる集積によつて本質を構成するものではない。否それ処か、その意義はつねに一つの統一性としての意義である。而して〃文化とパァスナリティ〃研究において、これらの統一性としての諸条件をみたすものは、〃基礎的パァスナリティ構造体〃の概念である様に思われる。何故なら、既に示して来た如く、この概念は一方において文化としての意義を持ち、他方において個人としての意義をもつているからである。

附　記

紙幅の関係上、カーディナーの〃基礎的パァスナリティ構造体〃の概念に対する批判を記載しえなかつた。遺憾に思う。今日、カーディナーの反論として欧米においては、パースンズ、マッキィヴァ、レヴィン、G・オールポート、デュボア、クラックホーン、ギンスバーグ等、わが国においては武田教授その他二、三の学者の所説がみられる。これらの反論に二種ある。一は、カーディナーのこの概念を全く無視する立場。例えばG・オールポートの如き、カーディナーは〃パァスナリティとは文化の主観的側面にすぎない。〃という誇張的論旨に基いて、これらの関係を過度に単純化し、個人を数々の部分に切離すことによつて、問題の解決を計ろうとしている。すなわちカーディナーに従えば、社会的要因によつて決定される部分が〃基礎的パァスナリティ構造体〃であり、残余の部分は生物学的に決定された諸個人に特有なものである。しかしこのような解決は、事実上裂目のない処に人為的な裂目を設けたものであり、すべて失敗に終つていると迄極論している。二は、この概念の有効性、正当性を認め乍らも、これのみによつて解決されるものでなく、いわば作業用具としてのこの概念を〃万能器具〃とみない立場、この立場に二つある。一は、ギンスバーグの如く、〃基礎的パァスナリティ構造体〃のごとき概念は、小規模な同質的社会に関してのみ有効であるも、高度に分化した現代社会に適用することは危険であるとし、適用の限界性を示すもの。二は、パースンズの如く、これのみでなく、別種のパァスナリティ構造体をも要請するもの。かれによれば、〃基礎的パァスナリティ構造体〃は、パァスナリティの統一構造体や、その価値指向規制の一側面にすぎないものである。例えば、いかなる人間有機体もその発生的構造を同じくするものでないから、たとえ同一のえいきようといえども、異つた発生的材料に作用するときには、当然その結果をことにするだろう。かくしてパァスナリティ構造体の変異性は、社会体系の役割構造に関係

するものであり、このことは、我々がいろいろの社会体系の、基本的な動機づけの諸過程を説明するのに、〃基礎的パァスナリティ構造体〃の成立にのみ頼ることの出来ないことを意味する。パースンズの意図するものが、単に幼児期に於ける〃基礎的パァスナリティ構造体〃の成立にのみ止らず、その他に、身分＝役割パァスナリティ構造体と云つた如き、〃基礎的パァスナリティ構造体〃のその後に来るものを、指示することにあるとみて差支えないだろう。この限りにおいて、武田教授が〃人間のパァスナリティの形成を、たゞ家族集団の内部にのみ限定して、これを強調しすぎることは、一面的観察たるをまぬがれない。〃と暗に、カーディナーの考え方の飛躍を（特にかれのヨーロッパ文明社会の歴史的解釈にそのような傾向がみられよう。）いましめ、〃基礎的パァスナリティ構造体〃の外に、ステータス・パァスナリティといつた如きものを指摘しているのは、武田教授の考えが、パースンズと同じ批判的傾向に属するものと云えよう。

而してかゝる傾向は、カーディナーの批判における最も重大な点であると信ずる。〃基礎的パァスナリティ構造体〃の〃その後に来るもの〃、それは〃文化とパァスナリティ〃研究における、今後のもつとも興味ある課題である。惟うに批判は易く、創造は難い。真の批判は過去の創造を乗りこえたものでなくてはならない。筆者はこゝに早急の批判を下すことなく、今後の一層の研究をまつてその進むべき道を明かにしたい。とまれ、キュヴィリエが〃現代における多くの文化人類学者たちは、ひとしくパァスナリティの分析にたずさわりながら、文化範型（パターン）、文化類型、および社会的役割の、所謂〃基礎的パァスナリティ構造体〃に対するえいきよう力を明かにする方向に進んでいる。〃と云い、また米山教授が、〃最近における社会人類学への精神分析の導入という傾向を思い併せ、カーディナーの所謂〃第二次的制度〃といつたものとしての、産業に於ける人間環境をよりよく理解するためには、われわれは産業社会学に

於ける精神分析学の地位というものについても、再検討してみる必要はないであろうか。〃と要請している今日、カーディナーのこの概念が、そのうちに多くの問題点を包蔵しつゝも、現代的課題である〃人間の科学〃の樹立にあたつて、重要な地位を占めていることは否定出来ない。現代我が国の社会学における動向と課題から筆者がときおこして、文化人類学、文化の概念の説明を経て、文化とパァスナリティ研究に及び、更に焦点をしぼつて、カーディナーの〃基礎的パァスナリティ構造体〃の概念に結んだ所以はこゝにあつたのである。